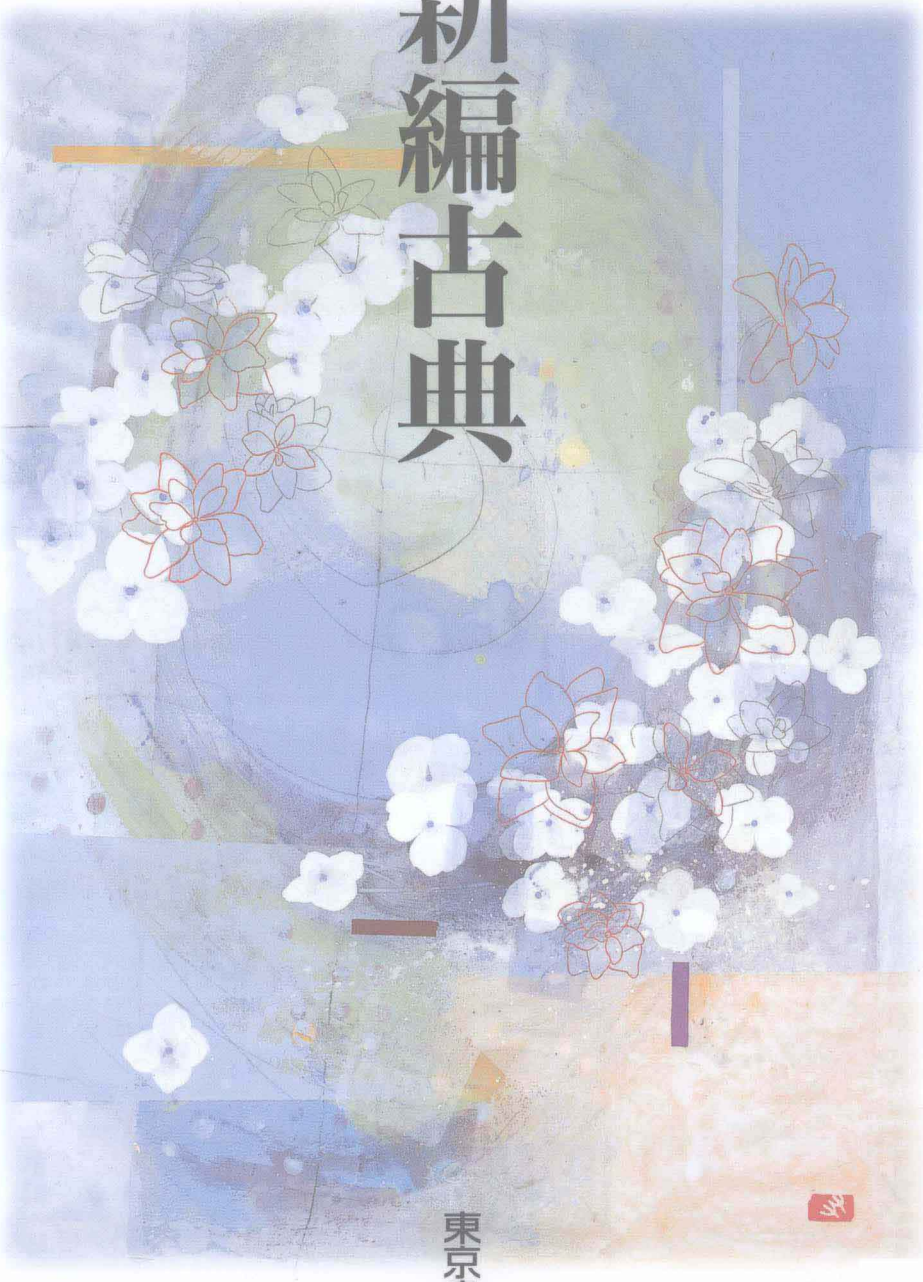
高等学校国語科用
文部科学省検定済教科書
2 東書 古典026

新編古典



東京書籍

新編古典

常州大学図書館
藏書章

東京書籍

目次

1 説話に親しむ

宇治拾遺物語

袴垂、保昌に会ふこと……10
小野篁、広才のこと……13

今昔物語集

兵だつる者、我が影を怖るること……15

2 随筆を読む

徒然草 兼好法師

ある者、小野道風の書ける……20
五月五日、賀茂の競べ馬を見侍りしに……21
これも仁和寺の法師……23
九月二十日のころ……26

❖古文の窓1 兼好法師、実はこんな一面も……28

3 軍記を味わう

平家物語

祇園精舎……30
橋合戦……32

4 和歌の世界

私の百人一首　白洲正子……42

❖古文の窓2『小倉百人一首』とかるた……52

5 物語に親しむ

伊勢物語

筒井筒……56／東下り……58

大和物語

姨捨……62

6 日記を読む

土佐日記　紀　貫之

馬のはなむけ……66／黒鳥のもとに……67／帰京……70

❖古文の窓3　平安時代の船の旅……72

7 小説を楽しむ

西鶴諸国ばなし　井原西鶴

大晦日はあはぬ算用……74

◆古典芸能への誘い……81

古文編 Ⅱ部

1 随筆を味わう

枕草子 清少納言

うつくしきもの……90／中納言参り給ひて……92

野分のまたの日こそ……94／雪のいと高う降りたるを……97

❖古文の窓4 清少納言と中宮定子……98

2 歴史物語を読む

大鏡

花山天皇の出家……100

若き日の道長……105

3 日記を味わう

更級日記 菅原孝標女

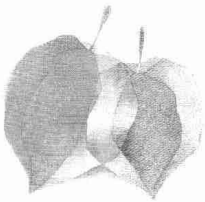
門出……112／物語……114

蜻蛉日記 藤原道綱母

なげきつつひとり寝る夜……117

紫式部日記 紫式部

うきたる世……120



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

4 物語を楽しむ

源氏物語 紫式部

若紫……124／〈参考〉桐壺……131

❖古文の窓5 その後の若紫……132

5 近世の紀行
——調べて文章にまとめる

奥の細道 松尾芭蕉

漂泊の思ひ……134／平泉……138

調べたことを文章にまとめ発表する……141

6 歌話・俳談を読む

無名抄 鴨長明

おもて歌のこと……144／出で映えすべき歌のこと……146

去来抄 向井去来

行く春を……148

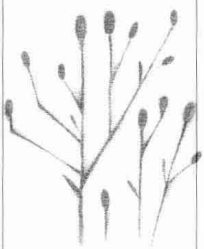
岩鼻や……150

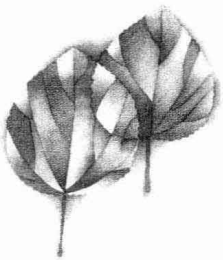
此木戸や……151

7 伝承の世界

古事記

倭建命……154





1 故事と小話

知音［呂氏春秋］／断腸［世説新語］／糟糠之妻［後漢書］／太公望［十八史略］／視吾舌。尚在不［史記］……164

2 唐詩と文

唐詩……172

宿建徳江［孟浩然］／鹿柴［王維］／秋風引［劉禹錫］／少年行［李白］／磧中作［岑参］／楓橋夜泊［張継］／登岳陽楼［杜甫］／破山寺後禅院［常建］／〈参考〉ふるでら／登高［杜甫］／八月十五日夜、禁中独直、対月憶元九［白居易］

文—二編……179

雑説［韓愈］／桃花源記［陶潛］

3 史記を読む

項羽と劉邦【史記】……186

鴻門之会／四面楚歌

❖**漢文の窓** 1 捲土重来……196

4 寓話を読む

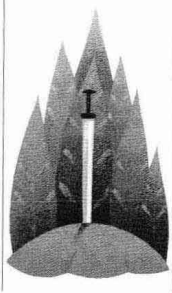
寓話—五編……198

長沮・桀溺［論語］／出藍誉［荀子］／侵官之害［韓非子］／刻舟求剣［呂氏春秋］／塞翁馬［淮南子］

5 三国志の世界

諸葛孔明【十八史略】……206

水魚之交／竭股肱之力／七縦七禽／死諸葛走生仲達



Ⅱ部

1 小話を読む

小話—四編……214
鼓腹撃壌［十八史略］／管鮑之交［史記］／宋襄之仁［十八史略］／鶏口牛後［十八史略］

2 古詩を味わう

古詩—六首……224
桃夭［詩経］／上邪［楽府詩集］／飲酒［陶潜］／送秘書晁監還日本［王維］／代悲白頭翁［劉希夷］／兵車行［杜甫］

❖漢文の窓2 訳詩のすすめ……232

3 史記を味わう

廉頗と藺相如【史記】……234
澠池之会／刎頸之交

4 中国の思想

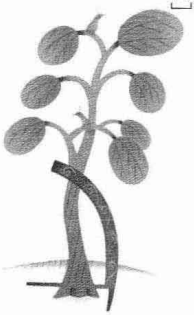
性相近也［論語］／不忍人之心［孟子］／人之性悪［荀子］／無用之用［老子］／曳尾於塗中［荘子］……242

5 日本の漢詩文

詩—四首……250
五言、臨終一絶［大津皇子］／〈参考〉万葉集 一首／山家［絶海中津］／桂林荘雑詠示諸生［広瀬淡窓］／題自画［夏目漱石］

語録—二編……253
人非聖人［貝原益軒］／渉世之道［佐藤一斎］

信玄と謙信【日本外史】……256
所争不在米塩／諸将服信玄



古文資料集

用言活用表（文語・口語対照）―― 2
文語助動詞活用表 ―― 4
文語助詞一覧表 ―― 6
小倉百人一首 ―― 8
古文重要語句 ―― 14
日本古典文学史年表 ―― 20
近畿付近図 ―― 〔後見返し〕

漢文資料集

漢文基本句法のまとめ ―― 24
故事成語 ―― 26
中国文学史年表 ―― 28
中国参考地図 ―― 〔後見返し〕

古典参考図録

―― 〔前見返し・前(後)口絵〕

この教科書で学習するために

◆この教科書は、古文編、漢文編の順序で配列し、それぞれをI部とII部とで構成した。

◆各単元の扉には、その単元で学習する主な目標と、学習のきっかけとなるメッセージを掲げた。

◆各教材末に「学習」を設け、その教材の特性に応じた設問を示した。また古文編には、適宜「国語の変遷」を設け、解説や設問を示した。

◆古文編II部「5近世の紀行――調べて文章にまとめる」の単元では、学習活動例を示した。

◆各教材の注欄には、次のものを設けた。

注　①②…の番号を付して、主として固有名詞、難解な語句について解説した。

発問　読解上注意したい本文の箇所に◇印を付して、注欄に問いを示した。

注意すべき語句　古文教材では、＊印を付して基本的な古語を掲げた。

句法　漢文教材では、▼印を付して、基本的な句法・助字を掲げ、「漢文資料集」にも「漢文基本句法のまとめ」を設けた。

◆各教材の作者は■印、出典は▶印を付して示した。

◆発展学習などのために、適宜参考教材を掲げた。

◆引用した箇所を示す場合、〈　〉内に、ページ数を漢数字で、行を算用数字で示した。（例）〈二四六・8〉

◆古文編では、「古典芸能への誘い」を設け、古典芸能について解説した。

◆古文編では、「**古文の窓**」、漢文編では、「**漢文の窓**」を設け、教材に関連した内容を取り上げ、理解が深まるようにした。

古文編 I 部

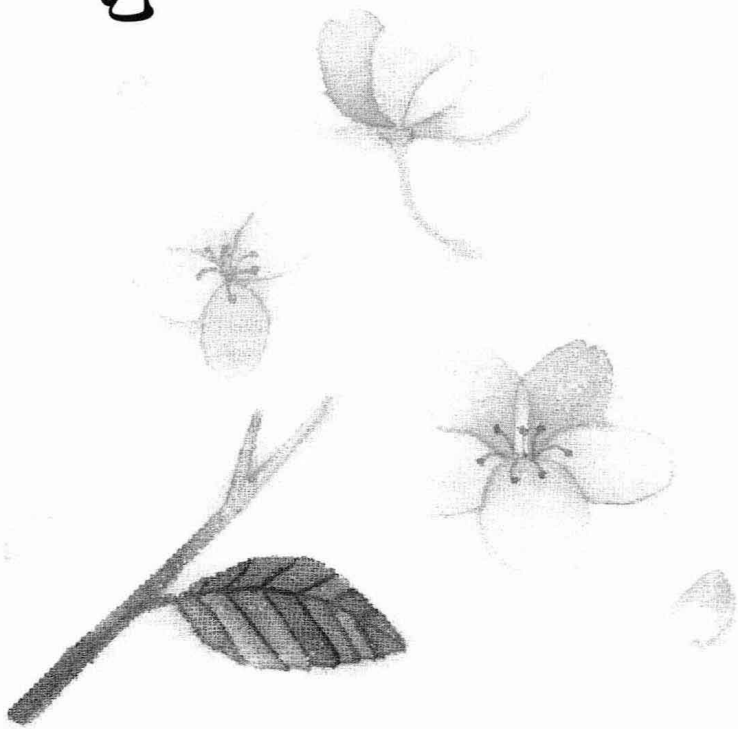
1

説話に親しむ

宇治拾遺物語
今昔物語集

◎説話を読み、その構成や展開に即してあら筋をとらえる。
◎説話に叙述された世界を読み味わう。

世間話がもととなり、多くの「説話」が生まれた。昔の人はどのような話に興味を持っていたのだろう。



宇治拾遺物語

袴垂、保昌に会ふこと

昔、①袴垂とていみじき盗人の②大将軍ありけり。十月ばかりに③衣の用なりければ、衣少し④まうけむとて、さるべき所々うかがひありきけるに、夜中ばかりに、人、みな静まり果てて後、月のおぼろなるに、衣、あまた着たりける主の、⑤指貫の⑥稜はさみて、絹の⑦狩衣めきたる着て、ただ一人、笛吹きて、行きもやらず練り行けば、あはれ、これこそ、我に衣得させむとて出でたる人なめりと思ひて、走りかかりて、衣を剝がむと思ふに、あやしくものの恐ろしくおぼえければ、添ひて⑧二、三町ばかり行けども、我に人こそ付きたれと思ひたるけしきもなし。いよいよ笛を吹きて行けば、試みむと思ひて、⑨足

①**袴垂**　平安時代中期の伝説的盗賊。
②**大将軍**　ここでは、首領・頭目の意。
③**衣の用なりければ**　衣服が必要になったので。
④**まうけむ**　（奪って）調えよう。
⑤**指貫**　狩衣などの下に着用する袴。
⑥**稜はさみて**　股立ち（袴の左右の脇の開いている部分）を帯に挟み。
⑦**狩衣**　貴族の平常服。
注⑤⑦は古典参考図録「男性の装束」参照。
⑧**二、三町**　一町は約一〇九メートル。
⑨**足を高くして**　足音を高く響かせて。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

を高くして走り寄りたるに、笛を吹きながら見返りたるけしき、取りかかるべくもおぼえざりければ、走り退きぬ。

かやうに、あまたたび、⑩とざまかうざまにするに、*つゆばかりも騒ぎたるけしきなし。希有の人かなと思ひて、十余町ばかり具して行く。⑪さりとてあらむやはと思ひて、刀を抜きて走りかかりたる時に、そのたび、笛を吹きやみて、立ち返りて、「こは何者ぞ。」と問ふに、心も失せて、我にもあらでつい⑫居られぬ。また、「いかなる者ぞ。」と問へば、今は逃ぐともよも⑬逃がさじとおぼえければ、「引剝に候ふ。」と言へば、「何者ぞ。」と問へば、「字、袴垂となむいはれ候ふ。」と答ふ

「藤原保昌月下弄笛図」（月岡芳年筆）

⑩**とざまかうざまにするに**　あれこれ試してみるが。

⑪**さりとてあらむやは**　そうかといって、このままでいられようか。いや、いられないだろう。

⑫**つい居られぬ**　自然とひざまずいてしまった。

⑬**よも逃がさじ**　まさか逃がしはしないだろう。

＊いみじ　あまた　あやし
おぼゆ　けしき
つゆ…なし（ず）　候ふ

れば、「*さいふ者ありと聞くぞ。①危ふげに希有のやつかな」と言ひて、「ともに②*まうで来。」とばかり言ひかけて、また、同じやうに笛吹きて行く。

この人のけしき、今は逃ぐともよも逃がさじとおぼえければ、③鬼に神取られたるやうにて、ともに行くほどに、家に行き着きぬ。いづこぞと思へば、④摂津前司保昌⑤といふ人なりけり。家の内に呼び入れて、綿厚き衣一つを賜りて、「衣の用あらむ時は、*参りて申せ。⑥心も知らざらむ人に取りかかりて、なんぢ過ちすな」とありしこそ、*あさましく、*むくつけく、恐ろしかりしか。いみじかりし人のありさまなりと、捕らへられて後、語りける。

①危ふげに　いかにも物騒で。
②まうで来　付いて参れ。
③鬼に神取られたるやうにて　鬼に魂を取られてしまったようで。
④摂津前司　前摂津守。「摂津」は、今の兵庫県東部と大阪府の北部。
⑤保昌　藤原保昌。諸国の国司を務める。〔九五八―一〇三六〕
⑥心も知らざらむ人　素姓も分からないような相手。

＊さ　まうで来　賜る　参る
申す　あさまし　むくつけし

学習

1 「取りかかるべくもおぼえざりければ」〈一一・1〉とあるが、袴垂は、なぜこのように思ったのか。
2 「ともにまうで来」〈一二・2〉と言われた時の袴垂の心情はどのようなものであったか、想像してみよう。
3 保昌は、どのような考えから袴垂に「綿厚き衣一つ」〈一二・7〉を与えたのか。

小野篁、広才のこと

今は昔、①小野篁といふ人おはしけり。②嵯峨の帝の③御時に、内裏に札を立てたりけるに、「無悪善」と書きたりけり。帝、篁に、「読め。」と仰せられたりければ、「④読みは読み候ひなむ。されど、恐れにて候へば、⑤え申し候はじ。」と奏しければ、「ただ申せ。」と、たびたび仰せられければ、「『⑥さがなくてよからむ』と申して候ふぞ。されば、君をのろひ参らせて候ふなり。」と申しければ、「これは、⑦おのれ放ちては、⑧誰か書かむ。」と仰せられければ、「されば こそ、申し候はじとは申して候ひつれ。」と申すに、帝、「さて、何も、⑨書きたらむものは、読

小野篁（『古画類聚』松平定信編）

①**小野篁**　平安時代初期の漢詩人、歌人。〔八〇二―八五二〕

②**嵯峨の帝**　嵯峨天皇。第五十二代天皇。〔七八六―八四二〕

③**御時**　ご在位の時。嵯峨天皇は八〇九年から八二三年まで在位。

④**読みは読み候ひなむ**　読むことは読みましょう。

⑤**え申し候はじ**　申し上げられません。

⑥**さがなくてよからむ**　「無悪善」を「悪無くて善からむ」と訓読した。「さが」はここでは悪い性質のこと。「嵯峨」を掛けた言い方。

⑦**おのれ放ちては**　おまえを除いては。

⑧**誰か書かむ**　だれが書こうか、だれも書くはずがない。

⑨**書きたらむものは、読みてむや**　文字で書いてあるようなものはきっと読めるのか。

＊おはす　仰す　え…じ（ず）　奏す　さが　されば　さて

みてむや。」と仰せられければ、「何にても、読み候ひなむ。」と申しければ、①片仮名の「ね」文字を十二書かせ*給ひて、「読め。」と仰せられければ、「ねこの子のこねこ、ししの子のこじし。」と読みたりければ、帝ほほ笑ませ給ひて、②事なくてやみにけり。

①**片仮名の「ね」文字**　「子」。今の「ネ」よりも「子」を使うのが一般的であった。

②**事なくてやみにけり**　おとがめなくすんだ。

＊給ふ

嵯峨天皇

学習

1 それぞれの会話文の話し手はだれか。考えながら読んでみよう。

2 「君をのろひ参らせて候ふなり。」〈一三・9〉とあるが、なぜそう言えるのか。

3 箕は十二の「子」文字をどう読み解いたのか、説明してみよう。

4 帝が箕をとがめることなくすませたのはなぜか、その理由を考えてみよう。

宇治拾遺物語　鎌倉時代の説話集。十三世紀初めごろに成立した。編者は未詳。百九十七編の説話が収められている。

今昔物語集

兵だつる者、我が影を怖るること

今は昔、受領の①郎等して、人に猛く見えむと思ひて、えも言はず②兵だてける者ありけり。

暁に家を出でて、ものへ行かむとしけるに、夫はいまだ臥したりけるに、妻起きて食物のことなどせむとするに、③有明の月の、板間より屋の内にさし入りたりけるに、月の光に、妻の、己が影の映りたりけるを見て、④髪おぼとれたる⑤大きなる童盗人の、物取らむとて入りにけるぞと思ひければ、あわて惑ひて、夫の臥したるもとに逃げ行きて、夫の耳にさし当てて、ひそかに、「かしこに、大きなる童盗人の髪おぼとれたるが、物取らむとて入りて立てるぞ」と言ひ

5

①郎等して　従者であって。

②兵だてける者　勇士らしく見せかけている者。

③有明の月　夜が明けても残っている月。陰暦十六日以後、特に二十日以後の月をいう。

④髪おぼとれたる　髪が乱れ広がっている。

⑤大きなる童盗人　体の大きな童髪（結わずに垂らした髪型）の盗人。

ければ、夫、「それをばいかがせむとする。いみじきことかな」と言ひて、枕上に長刀を置きたるを探り取りて、「そやつのしや頸打ち落とさむ」と言ひて起きて、裸なる者の①髻放ちたるが、太刀を持ちて出でて見るに、また、その己が影の映りたりけるを見て、②はやう、童にはあらで、太刀抜きたる者にこそありけれと思ひて、頭打ち破られぬとおぼえければ、いと高くはなくて、「をう」と叫びて、妻のある所に返り入りて、妻に、「わ御許は、うるさき兵の妻とこそ思ひつるに、目をこそいみじくつたなく見けれ。いつか童盗人なりける。髻放ちたる男の、太刀を抜きて持ちたるにこそありけれ。③者はいみじき臆病の者よ。我が出でたりつるを見て、持ちたりつる太刀をも落としつばかりこそ震ひつれ」と言ふは、我が震ひける影の映りたるを見て言ふなるべし。

さて、妻に、「かれ行きて追ひ出だせ。我を見て震ひつるは、怖ろしと思ひつるにこそあんめれ。我はものへ行かむずる門出なれば、

①髻放ちたるが　（被りものを付けず）髻をあらわにした者が。
②はやう…けれ　なんと…ではないか。
③者は　あいつは、の意。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com